

# 李朝白磁の特質

山田友治

基礎教育課程

A Characteristic of Rhee Dynasty White Porcelain

YAMADA Tomoharu

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 10, 2006 ; Accepted January 9, 2007)

## 1. はじめに

韓国を代表するやきものに高麗青磁と朝鮮白磁（通称李朝白磁、以降李朝白磁と称す）がある。前者は高麗時代（西暦918年～1392年）を中心につくられた青磁で、越州窯をはじめとする中国陶磁の影響のもとに成立したが、12世紀後半になると独自の発展を遂げ、翡色と呼ばれる青磁を完成させた。一方、李朝白磁は朝鮮王朝（李王朝）時代（西暦1392年～1910年）につくられた白磁を指すが、長い治政の間に幾多の変遷をみた。そのことについては後述するが、16世紀末豊臣秀吉の朝鮮侵略が当時の窯業に大きな打撃を与え、その折日本へ連行された陶工は各地で窯を開きその後の日本の陶磁に大きな影響をもたらしたという事実がある。

この2種類のやきもの、つまり高麗青磁と李朝白磁は今日でも陶磁愛好者にとって垂涎の的となっている。そこで今回、手元にある4点の李朝白磁をもとにその特質に触れるとともに、彼地と異なり日本では作る側にも使う側にも白磁というものが定着していないという実態について考えてみたい。

## 2. 李朝白磁の変遷

まず、『日本陶磁大辞典』の「李朝白磁」の項からその変遷について触れておきたい。

李朝白磁はおよそ前期（15世紀前半～16世紀末）、中期（17世紀初～18世紀中葉）、後期（18世紀中葉～19世紀中葉）、末期（19世紀後半～20世紀初）の4期に区分される。

白磁は既に高麗時代に存在しているが軟質白磁であった。14世紀末に中国の影響を受け軟質白磁がつくり始められる。朝鮮王朝為政者の白磁への関心が強かったこともあり、御器には専ら白磁が用いられている。こうした動きを受けて、1460～70年代に官窯が築かれ白磁の生産

が本格化する。15～16世紀の官窯で焼かれた良質白磁は、乳白色を帯びており、外反鉢、胎壺、鏝縁皿などを主体とし、断片が二等辺三角形をなす高台や細かな砂目を特色とする。こうした白磁の上には青花、鉄砂透かし彫り・陰刻・象嵌などが施されたものがみられる。一方、官窯の脇窯で焼かれた白磁は灰色や青白色を帯び、器形は同じであるが表面を整えず、竹節高台をつくる。また、高台畳付きに胎土目を用いるなど造形には開きがある。地方窯でも官窯の脇窯と似た製品がつくられるが、畳付きは砂目・胎土目、練砂目、耐火土目など、地方によって異なる目を用いるほか、色も緑色や灰白色を帯びる例が多い。

16世紀末ごろから17世紀になると、官窯でもやや灰味がかかった白磁が登場し、砂目を用いている。中国清朝との関係悪化による輸入コバルト顔料不足のため、青花は稀であるが、鉄砂による文様が施された例が増加する。脇窯では灰白色の白磁が主体となり、高台の裏面がアーチ形に内湾する高台が登場し、砂目が一般的となる。地方窯の様相もほぼ同じである。17世紀末ごろから18世紀前半にかけては、雪白色と呼ばれる美しい白磁の色が復活し、それまでであった高台裏面の銘は消える。18世紀前半ごろには、焼成温度がやや低く柔らかな色調を帯びるようになり、細かな砂目を用いる。器種も、俗に「李朝大壺」と呼ばれる大型の壺のほか、面取りや板づくりによる祭器や角瓶などがつくられた。18世紀には官窯が金沙里から分院里に移り、焼成温度が上がって硬質となり、白磁の色は光沢の強い雪白色となる。青花・透かし彫り・鉄砂・辰砂・陽刻など、さまざまな装飾が施されるようになる。

19世紀前半になると青白色を帯び、器壁も実用に即して厚くなる。そのため底づくりも深く削ったものとなる。砂目や耐火土目を用いる例が多く、器種も文房具や趣味性の高いものが増える。19世紀後半の白磁は黄白色を帯

び粗い砂目を用いる。全体に粗質化が進み、粗いつくりの白磁鉢が大量につくられた。しかし、日本磁器の登場と青磁に偏重した日本植民地政策のなかでその命脈を閉じることとなった。

このように変遷を概観すると、器の色調、高台の形状、目にそれぞれ時代の特徴が表れていることが読み取れる。次に先述の李朝白磁4点についてその特徴を述べよう。

#### (1) 白磁蕪形長頸瓶 (挿図1)

蕪形の胴に長い頸をもつ瓶である。何の装飾や銜いもなく誠にすっきりとした簡素な器であり、均整のとれた形状は安定感とともに安らぎを覚える。

胴下半にはろくろ目がわずかに認められるものの口頸部にかけて一気に引き上げられており、極めて丁寧な整形とともに全体に滑らかな印象を受け、陶工の技倆の深さを知ることができる。口縁部はわずかに外反させて4ミリ程のふくらみをとっている。この端部は2ヶ所にわずかな欠損があり補修されている。口頸部の内側は外から観察する限りろくろ目がよく認められ、釉は胴部と頸部の境までかけられているようである。

高台は逆梯形状をなし外側ではなく内側に少し傾斜している。底裏にも釉がかかり同心円が3条認められる。さらには円状の目跡も観察される。畳付きはざらざらと荒く凸凹しており、高台内側には粗い砂が点々と付着し、同じく高台外側も砂や剥離痕が認められる。全体の色調はやや青みがかかった乳白色で光沢があり、よく観察すると帯状に垂下する淡い青釉が認められる。

器高：23.7 cm、胴部最大径：15.4 cm

高台径：9.7 cm、口径：5.5 cm

#### (2) 白磁草花文瓶 (挿図2)

本例のみ他の3例とは色調が異なり灰白色と言おうかやや緑がかっており、釉調もムラが多く所々に釉のかかっていない地肌が見える部分があり、かつ磁土に含まれていたとみられる鉄分が発色した茶色の小さい円状のシミが数か所認められる。胴の上半分にはろくろにより細かな条線が観察できる。

この瓶の特徴は胴上半の前面と後面に描かれた回青(コバルト)の草花文である。李朝時代コバルトが貴重であったこと、これによる装飾を贅沢と見る考え方から特別な用途を除くと使われているにしてもその使用量は少ない。本例もその1つで一筆により細いススキ状の線が半円形に軽やかなタッチで描かれているが、具体的にどういう種の草花と特定できるものではない。しかしこの広い胴面にこの絵が描かれていることにより、この器全体を引き締め、安定感を示していることは間違いない。

口縁部は胴部からラップ状に大きく外反し、さらにその口縁からやや外反する高さ2センチ程の口がつくいわ

ゆる二重口縁となっており、我が国ではあまり類例のない形状でこの瓶に重味を与えている。口縁部内側はその取付部まで釉がかかっている。

高台はやはり逆梯形状をなして内弯し、取付部分は釉が厚く溜まりその境目はぼんやりしている。底裏にも釉がかかり数条の同心円が観察できる。畳付きは荒い砂というより小石が喰い込んでおり、ざらざらしている。また、転倒防止のために円筒状の窯道具を使用したものかその剥離痕も認められる。

器高：25.4 cm、胴部最大径：14.5 cm

高台径：8.1 cm、口径：7.1 cm

#### (3) 白磁壺 (挿図3)

通称提灯壺と呼ばれる白磁の壺である。胴部高24.5 cm、胴部最大径26.6 cm とほぼ球形を呈し、口径と高台径が近似し、それぞれ同じ傾きで外反しているため上下を逆にしてもおかしくない形状である。非常に安定感のある外形で球形の重心が少し下に位置していることがその感を強めている。熟練した陶工によるろくろ仕上げは殆どろくろ目をみせず滑らかな肌を呈している。胴の片面には細かい貫入が認められる。

口縁と胴の継ぎ目には釉溜まりがあり、美しい青色を呈している。口縁は「く」の字形に直線的に折り反し、その端部は水平に気持ちよく裁断されている。畳付きは細かい砂目で砂が遺存しており、断面の形状は長方形で畳付きより少し上で削りが入り、竹節高台のようでもある。底裏にも釉がかかり、茶色いシミが点々と見られ、削り出しが深い。

器の内側はろくろ目がよく観察でき、釉は見込み部の半分程を除いて全体にかかっている。この壺はその形、光沢ある釉調などからみて李朝白磁の優品と思われるが、残念ながら高台に歪みがあり、そのため平面上に置いた場合には口縁が左右で少し高さが異なる。

器高：27.9 cm、口縁部器厚：1 cm

底部器厚：1 cm

#### (4) 白磁雲鶴文水滴 (挿図4)

四角の底板に4枚の長方形の粘土板を置いて蓋を被せた作りである。水を入れる口は5 mm 程の円で、天板のほぼ中央に穿たれておりそれを中心として対角線に沿って羽を拡げた2羽の鶴の口が挟む形をとっており、その鶴をコバルトで描き、藍色を呈している。さらに、水を注入する時周囲に水がこぼれないように羽を拡げた内側が周辺より低くなるように整形されている。雲文は注水口を除く3面に描かれており、四隅をかぎ括弧で囲いその中に配している。

注水口は正面から見ると瓢形をなしており、ほぼ垂直に穴があげられている。全体に細かいシミが認められ、

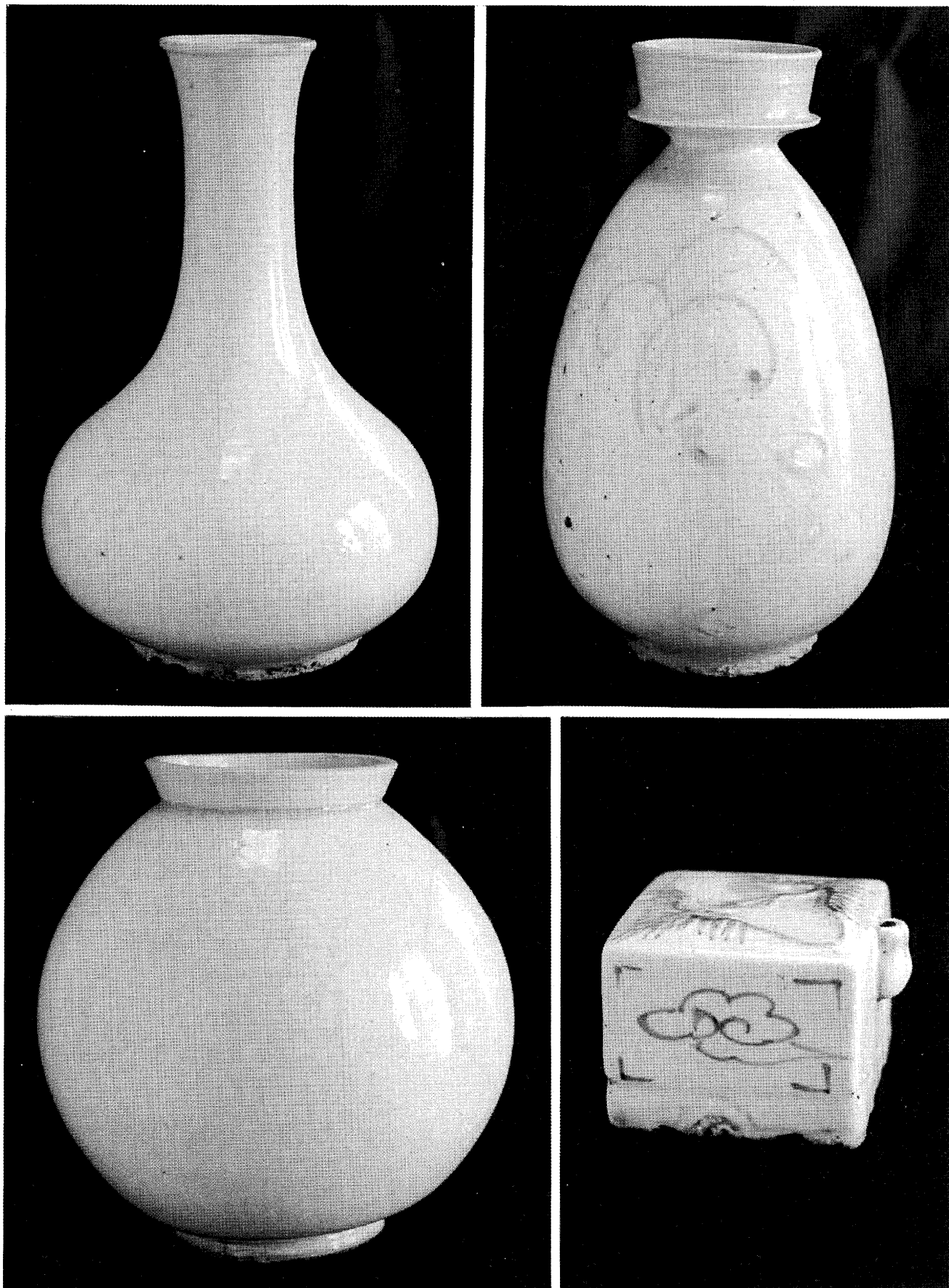
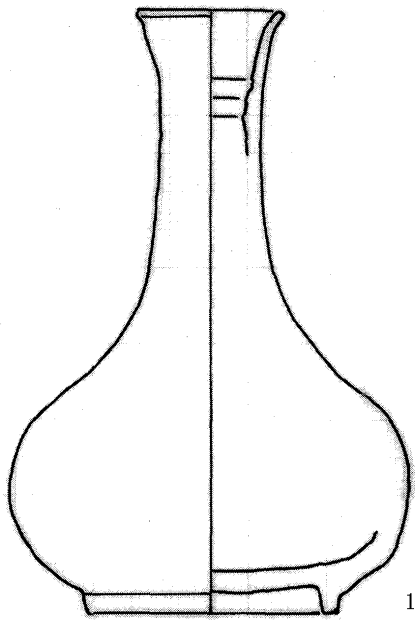
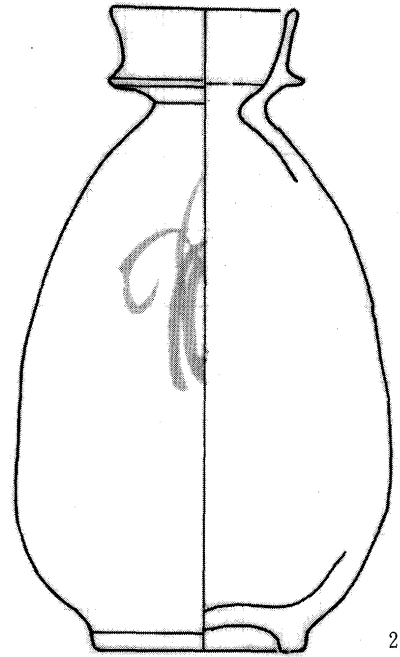


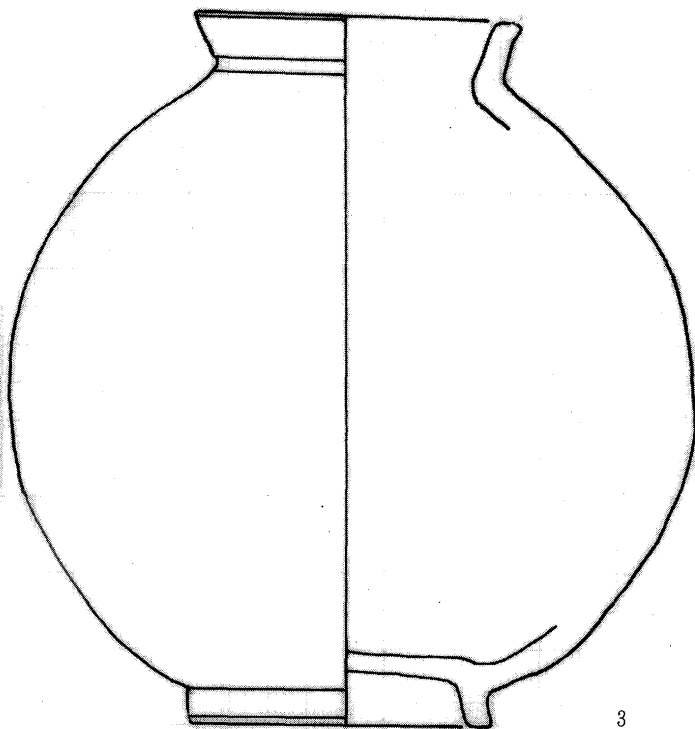
図 李朝白磁の特質



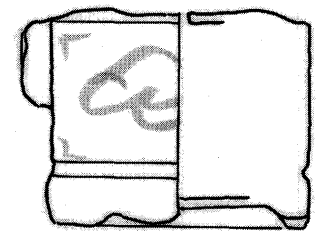
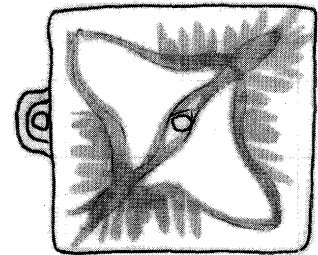
1



2



3



4

0 10 cm

0 10 cm

- |         |         |
|---------|---------|
| 1 燕形長頸瓶 | 2 草花文瓶  |
| 3 壺     | 4 雲鶴文水滴 |

図 李朝白磁の特質

色調も淡青色に近い。胴下半に一条の括り込みがありそれから下が高台と考えられるが、畳付きの形状はやはり雲文を型どったと思われ、細かい砂目で砂の付着は殆ど認められないが、灰黒色で焼けただれたような印象を受ける。底裏にも満遍なく釉がかかっている。

器高：5.8 cm、天板：6.5×6.7 cm

以上が4点についての説明である。色調は燕形長頸瓶が乳白色、提灯壺が淡青色、草花文瓶が淡緑色、雲鶴文水滴が淡青色と、同じ白磁でも色調が異なる。ただ、いずれも畳付きは粗い、細かいは別にして砂目である点が共通している。これらはいずれも李朝後期に属すると考えられるが、作風、色調などから長頸瓶、提灯壺と他の2点では明らかな差が認められ、官窯と脇窯あるいは地方窯の差と考えられるかもしれない。しかし、美的な感覚は各人各様でいずれが菖蒲でいずれが杜若かは決められない。

### 3. 同時代の我が国の状況

つぎにこの李朝期つまり14世紀末から19世紀初の間、我が国のやきものはどのようなものであったかについて触れたい。李朝の建国はちょうど室町幕府の最盛期に当たる。この時代、唯一の施釉陶器を生産していたのは瀬戸であり、仏器、花器など高級陶器を全国に供給している。それは中国の青磁の代替品でもあった。その他は常滑、越前、信楽、丹波、備前を中心にいわゆる中世窯が展開していた。これら諸窯では、壺、甕、鉢を主として日常生活雑器を生産していたのである。

いずれの諸窯も古墳時代以来の須恵器を母体とするか、平安時代に猿投窯で生産された灰釉陶器を母体として発展したものかである。瀬戸窯で生産された国産高級陶器は、当時幕府によって輸入された中国竜泉窯の青磁を範としている。つまり、当時幕府をはじめ上流階級の者は中国青磁を愛でていたのである。

ところが、室町幕府が織田信長によって倒され織豊政権つまり安土・桃山時代に入ると、利休が茶道を確立しそれまでの中国ものを高級とする見方から李朝の民窯のやきものを良しとし、また、瀬戸を中心とするいわゆる六古窯の製品に美を見出しこれを奨励したことにより、これら諸窯でも雑器生産から茶器の生産へと切り替え、数々の名品を世に送り出すことになった。侘（わび）、寂（さび）の美が確立していくのもこの頃である。

我が国の陶器の源流である須恵器が、5世紀の中頃、当時の百済から技術と陶工がもたらされ発展していったように、中世では我が国に比して朝鮮半島での技術が抜きん出ており、舶来物をありがたがる風潮もあって李朝のやきものが幅を利かせていた。そのため、文禄、慶長

の役がやきもの戦争という別名で呼ばれる如く、彼地のやきものに強いあこがれを持っていた西国の諸大名は、侵略の折多くの陶工を日本に連行し、それぞれの領地で窯を築かせた。彼らを厚遇したこともあり、それぞれの地で彼地のやきものを再興する如く優れた作品を世に送り出し、多くは今日まで存続し伝統を伝えている。そのうち肥前の鍋島藩に召しかえられた李参平は藩内を限なく探査し、現在の泉山に良質の陶石を発見し、始めて我が国で磁器の焼成に成功した。ちょうど江戸時代初めのことである。

このように我が国の陶器、磁器のいずれもが朝鮮半島の技術、陶工によって成立したものであることは忘れてはならない事実である。そして、今日では2つの原材料、つまり粘土と陶石を用い、仕上りの違う陶器、磁器が併立して生産され、使用されている国は世界的に見ても珍しいし、その技術レベルの高さ、芸術性の高さも他国に抜きん出ていることは特記すべきである。

安土・桃山時代につくられ、今日に伝世する茶道具類をはじめとするやきものは、現在の陶芸家にとって目指すべき到達点であるとも言われている。多くは歪み、割れ、左右非対称など地味で不完全なものに美を見出す「粗相の美」を良しとした。これは諸外国の人々にとっては理解し難い、不良品として写るもので、それらに美を見出す特異な国民である。

### 5. 結 び

李朝白磁は世界的にも評価の高いやきものであり、我が国でもこれを愛好する者はいる。しかしながら、李参平が有田で磁器の焼成に成功して以降、我が国でも白磁は染付や色絵磁器とともに製作されたが、何故か広く用いられることもなく、今日でも白磁を主として製作している陶芸家は少ない。白磁あるいは白色を愛好する韓国民と我が国の国民性にはどうしてこのような開きがあるのかを考えてみたい。

李氏朝鮮は前高麗時代の仏教を否定し、中国の儒教を国教とした。高麗を代表する陶磁は青磁の青であるが、朝鮮時代は儒教の徳目に従って質朴で簡素な白が好まれた。特に「世宗朝御器は白磁を専用する」という記録から、白磁は王の日常使用ばかりでなく祭器や銀器の代わりにも使われ、白磁使用が次第にひろまっていったと思われる。

白磁の白は潔白の象徴であり、白に対する嗜好は、東アジア民族中蒙古人と韓人に特徴的なものがあると言われる。衣服にあって、明人が黒色を好み、日本人が青色を好むのと対称的である。『世宗実録』二年三月丁酉条に「元人尚白 大明尚黒 以至日本尚青…吾東方…常時

好着白衣」とある。白色に対する伝統的嗜好が早くから衣服に反映しているのであるが、用器にまでそれが反映し、そのため冷やかな白色ではなく温和な灰白色の器を作り出したのである。しかもこの白色に、混濁した社会を浄化し、精廉潔白な新興国家を建設しようとする政治的意志も投影したものであり、かつ、儒教的清白理念にまで昇華させたのである。つまり、多分に韓人特有の古代的、民族的嗜好を儒教的に昇華させたと言うこともできよう。

上述の日本人の色の好みが青であるという個所は興味深い。15世紀初めに朝鮮半島の人々は日本人が青を好むと認識していたことは、中国青磁や高麗青磁に強い愛着をみせていたことを指すと思われる。今日でも写真のプリントに空の青の濃さを強調する国民性は既にこの頃からあったのかとも考えられる。

一方、祖先を敬う儒教の色であった白磁に対し、同時代地方窯では粉青沙器がつくられた。粉青沙器についてはこの稿では詳述しないが、高麗青磁の伝統を技術的、思想的に発展させたものと言われている。白磁が支配者側の器であったのに対し、粉青沙器は庶民の生活用具としての雑器であり、美的に優れたものも多い。「三島手」と呼んできたものがそれで、線刻、刷毛目、鶏龍山、粉引きなど、簡素な鉢類、扁壺、小德利、茶碗類など多量に焼造された。日本の茶人たちが室町・桃山時代より現在に至るまで高麗茶碗として愛用し珍重している陶器は、その殆どが李朝時代前期の雑器だったのである。しかし、地方色の濃い粉青沙器も、朝鮮陶磁全体の白磁化及び再び金属器が陶磁器に代わり多用され始めるなどの要因で次第に姿を消していく。

我が国では室町時代、中国から輸入される青磁を最も価値あるものとして愛玩し、茶道具としても用いたが、千利休は、日常の雑器のなかにある歪み、アンシンメトリ、色ムラのある器などに美を見出した。この見方や考え方は広く定着し、その後の日本人の美意識の基礎を形成した。茶の湯の世界では「一井戸、二楽、三唐津」と言う言葉があり、茶碗の魅力をこの順に挙げている。書院の台子点前を離れた自由な草庵の侘び茶では、素朴

な高麗茶碗がふさわしいと重用された。もともとは日常生活に用いられた貧しい庶民の食器に無上の美しさを感じたのは初代の茶人達だったのである。彼ら茶人の心に潜在していた美意識が形となって現われ、以降日本人の美意識の根幹をなし、この美意識のもと我が国の諸窯で茶道具が焼かれていく。

利休をはじめとする茶人達の美意識は、白磁のような純潔で高貴な姿形とは相容れないものがあり、長らく茶道具として用いられることなく今日に至っている。こうした美意識は、茶の世界のみならず、日常に用いる陶磁器にも影響を与え、今日でも白磁の出番は少ない。

18世紀末、朝鮮王朝の実学者たちは盛んに清朝磁器や肥前磁器の絵柄を推賞したが、質朴を重んじた朝鮮王家を中心とする官窯ではついぞ色絵がつくられることはなかった。日本では傷のあるもの、色ムラのあるもの、歪みのあるもの、いびつなものに美を見出しているのに対し、韓国ではこうした器は使われないという。また、欠けやすい器、汚れやすい器を嫌い、清浄潔白な白を求めるといふ。確かに韓国の食堂の器は、写真や映像などで見る限り、白い器と金属器で統一されており、素材がプラスチックであっても、我が国のようなカラフルな、しかも円形に統一されない不揃いな器で構成されてはいない。

近くて遠い国から近くて近い国となった今日でも、民族の違いは身近なやきものの世界一つをとってもその美意識は大きく異なり、歴史と伝統の差を実感するものである。

なお、版下の作成は流山市立博物館の川根正教氏の手を煩わせた。紙面を借りて謝意を表します。

#### 参考・引用文献

- 1) 矢部良明ほか『日本陶磁大辞典』角川書店 2002
- 2) 林屋晴三ほか『世界陶磁全集19李朝』小学館 1980
- 3) 永竹 威『東洋陶磁の美』河出書房新社 1968
- 4) 伊藤郁太郎ほか『芸術新潮』一韓国一未知の美と出会う旅 新潮社 2006.8
- 5) 日本経済新聞『朝鮮陶磁』㊤、㊦ 日本経済新聞社 2005.9.10